

自由エネルギー原理と徳認識論

－拡張された能動的推論による信念形成プロセスの卓越性－

石戸雄飛(Yuhi ISHIDO)

東京大学総合文化研究科

本研究発表では、拡張された心説(Clark & Chalmers 1998)との関係で徳認識論における信頼性主義を捉えなおし、自由エネルギー原理(Free Energy Principle; 以下、FEP)の枠組みのなかで信念形成プロセスの卓越性を定式化することを目的とする。徳認識論を構成するフレームワークの一角として信頼性主義(reliabilism)を挙げられる。信頼性主義によると、真なる信念を形成する割合の高い認知能力を備える認知的エージェントは、信頼における(reliable)信念形成プロセスを有するという性質において知的徳や認識的徳を備えていることになる(植原 2019)。すなわち、知的徳や認識的徳を備えることは、信頼性の高い信念形成プロセスを卓越した能力として有することを意味する。そして、そのような卓越した能力によって形成された信念こそが、知識の名に値すると信頼性主義は捉える。

一方で、認識論の文脈では知識を外在化しようとする流れが顕著に存在する。知識の外在化への流れは、ゲティア問題を一つの契機としている(植原 2013)。ゲティア問題は、①信念の正当化が認知的エージェントにとってアクセス可能でなければならない ②正当化プロセスは認知的エージェントに内在するという 2 つの命題が存在するがために生じる。しかし、視覚を例にとってみたとき。認知的エージェントは、いくら網膜に注意を向けたところでそれにアクセスできるわけではない。つまり、信念の正当化にアクセスできない。しかし、だからといって視覚を通じて得た信念を知識から排除することは直観に反するだろう。

こうしてゲティア問題を回避するために、知識の外在化という流れが生じる。知識を外在化してしまえば、その正当化に認知的エージェントが内在的にアクセス可能でなくてもよくなる。知識の外在主義では、「知識の因果説」と同じように、正当化プロセスが因果的過程に置き換えられるからだ。すなわち、真なる信念が知識であるためには、それが適切な因果関係を通じて引き起こされていなければよいということになる。こうして、植原 2013 では拡張された心説(Clark & Chalmers 1998)に基づいて、知識が外在化する因果関係を思弁的に解明しようとする。しかし、拡張された心説に基づいて知識を環境側に置かれた認

知的人工物として措定できたとしても、それが認知的エージェントによって外在化される具体的なメカニズムの解明には未だ至っていない。そして、徳認識論との関係に注目するのであれば、その外在化プロセスまたは因果過程にどのような性質が備われば、信頼における信念形成プロセスとして扱えられるのかを明らかにせねばならない。

本研究発表では、認知的エージェントが知識を外在化するメカニズムとして「拡張された能動的推論(Extended Active Inference)」(Clark et. al. 2019)を取り上げる。そのうえで、拡張された能動的推論に基づいて徳認識論における信頼性主義を捉えなおすことを目指す。結果として、信頼における信念形成プロセスとは、脳-身体-環境という 3 つの独立のシステムが相互にカップリングされ、自由エネルギーが最小化されるプロセスのことを意味することとなる。すなわち、知識は FEP の循環論的因果性に基づいて信頼性を担保されることとなる。

参考文献

植原亮 (2013) 『実在論と知識の自然化－自然種の一般理論とその応用－』勁草書房.

----- (2019) 「徳認識論 / 知的徳」
[http://updatingphilosophyofai.net/resources/virtue_epistemology/](最終検索日：2020年7月8日).

Clark, A. & Chalmers, D. (1998) The Extended Mind, *Analysis*, 58-1, pp.7-19.

Clark, A., Constant, A., Kirchoff, M. & Friston, K.J. (2019) Extended active inference: Constructing predictive cognition beyond skulls, *Mind & Language*.